



# 京都大学の研究者が描く、 125年後の地球社会

くすのき・125 採択者紹介 | Vol.3 |



京都大学  
KYOTO UNIVERSITY

# 125年後の地球社会に向けた研究が、 いま、京都大学ではじまっています。



1897年に京都大学が創立されて以来、地球社会は大きく変化してきました。地球環境の深刻な変化、多様な価値観の表面化、感染症の世界的流行などに直面し、既存のパラダイムは行き詰まりを見せています。そんな状況の中、2022年に創立125周年を迎えた京都大学が、今だからこそ未来に向けて歩むべき方向を見据え、学内・学外の垣根を超えて魅力ある地球社会の未来像を構築・発信していきたい。そんな思いを胸に、新たな学内ファンド【くすのき・125】を立ち上げました。京都大学には、「創立以来築いてきた自由の学風を継承し、発展させつつ、多角的な課題の解決に挑戦

し、地球社会の調和ある共存に貢献する」という基本理念があります。この基本理念に立ち返り、既存の価値観にとらわれない自由な発想で、次の125年に向けて、調和した地球社会のビジョンを自ら描き、その実現に向けて挑戦している「おもしろい」次世代研究者を【くすのき・125】は支援します。

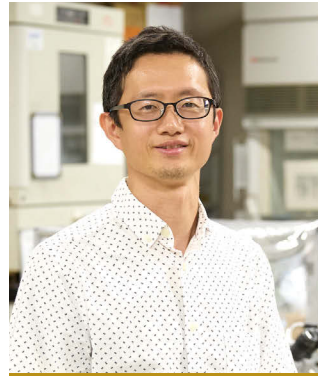
## くすのき・125とは

京都大学のシンボル「くすのき（楠）」は、ゆっくりと長い時間をかけて着実に大木へと生長します。このことから、ゆっくりであっても堅実に成長し、大成する学問は「楠学問」と呼ばれています。

【くすのき・125】は、京都大学が125年後、さらにそのずっと先まで、そのような研究・学問を育てる場となるようにとの想いを込め命名された、皆様からの寄付金を学内の教員に提供する学内ファンド（京都大学がめざす目標に向けて、京都大学が持つ資金を学内の教職員等に提供する制度）です。

C O N T E N T S

- 04 生物の「かたち」と「リズム」の関係を解明し、より良い人工臓器の実現へ。  
「筋収縮の波を使って臓器の『かたち』を創り出す」  
稲葉 真史 理学研究科 助教  
  
環境にやさしい技術で、人や社会に必要なとされる有機分子を自在につくりだす。  
「サステナブル有機合成」  
大宮 寛久 化学研究所 教授
- 05 記憶の物理的な実体をつきとめ、人々の生活の質の向上につなげたい。  
「『記憶』研究を社会応用するための技術開発」  
後藤 明弘 医学研究科 特定准教授  
  
岩石の物性を切り口に、大地の恵みをもたらす地中世界の物理法則を探究する。  
「地球熱システムの包括的理解が拓く地球と共存する社会」  
澤山 和貴 理学研究科 助教
- 06 熱エネルギーの本質「振電相互作用」を見える化し、誰も活用できる技術に昇華させる。  
「持続可能なエネルギー利用を実現する振電工学」  
志津 功将 化学研究所 助教  
  
生物のもつ酵素の力を解明し、クリーンで高効率な技術開発につなげる。  
「酵素と電極の直接接合によるバイオメテックス」  
宋和 慶盛 農学研究科 助教
- 07 小さな木片を通じて古代の人々の心に寄り添い、その息遣いを未来に届ける。  
「東アジアの木彫像の用材をめぐる学際融合研究」  
田鶴 寿弥子 生存圏研究所 講師  
  
自然免疫システムと遠隔転移の関係を究明し、人々が安心してがん治療に向き合える未来へ。  
「がんの遠隔転移は予防できるのか？」  
中島 良太 医学部附属病院 助教
- 08 細胞という小さな社会、そのインフラストラクチャーを自在にデザインし、生命を理解する。  
「『細胞内マイクロ建築学』の創成」  
中村 秀樹 白眉センター 特定准教授  
  
生命を駆動する現象「化学振動」を制御し、新しい化学の地平を拓く。  
「化学反応の『振動』と光触媒で実現する化学デバイス」  
浪花 晋平 工学研究科 助教
- 09 し尿や排水の「始末」を自分ごとと捉え、私たちの暮らしを変える。  
「未来のサニテーションが実現する自由なくらしと水・物質循環系」  
原田 英典 アジア・アフリカ地域研究研究科 准教授  
  
既存の放射線治療を超える治療法を確立し、「がんは治せる」時代を切り開く。  
「オージェ電子を用いた新規放射線治療を創出する」  
松本 光太郎 高等研究院 物質-細胞統合システム拠点 (iCeMS) 特定助教
- 10 物質の構造の歪みや乱れに着目し、元素の潜在能力を引き出す。  
「『乱雑さ』の科学から生まれる新しい物質開発」  
向吉 恵 理学研究科 助教



稲葉 真史  
INABA MASAFUMI  
理学研究科 助教

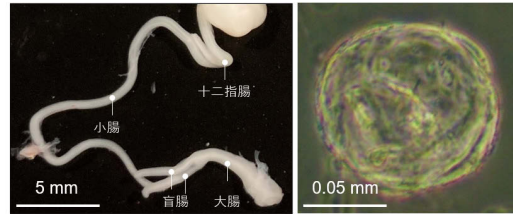
名古屋大学大学院理学研究科博士前期課程を経て、大阪大学大学院生命機能研究科博士課程修了。2020年より現職。魚や鳥の体表面のパターンの発生についての研究に取り組んだ後、腸の蠕動運動の発生や腸の伸長との関係についての研究を始める。生物の「かたち」を形成・維持するメカニズムを探求しながら、人工臓器研究への応用も視野に入れて研究に取り組んでいる。

生物の「かたち」と「リズム」の関係を解明し、より良い人工臓器の実現へ。

「筋収縮の波を使って臓器の『かたち』を創り出す」

再生医学の進歩によって、幹細胞から小さな臓器（オルガノイド）をつくることのできるようになってきています。

を口腔から肛門の方へと運ぶ役割を担う蠕動運動ですが、私たちが発生段階の腸の伸長にも関与していることをつきとめました。くすのき・125では、ニワトリの胚から取り出した腸に対して人工的に蠕動運動を起こし、伸長の様子を詳細に観察します。そして、その成果をオルガノイドに適用し、腸の形への成長を促すことをめざします。



右:ニワトリの腸オルガノイド  
左:ニワトリの胚から取り出した腸

しかし、現在作成できるオルガノイドは大きさも機能面も本来の臓器からは程遠いものです。そこで私は、臓器が実際の大きさと解き明かすことでオルガノイド研究を一步先に進めたいと考えています。その鍵となるのが腸の蠕動運動です。取り込んだ食べ物

さらに詳しい話は  
こちらから

環境にやさしい技術で、人や社会に必要なとされる有機分子を自在につくりだす。

「サステイナブル有機合成」

社会が必要とするものを届けるという化学者の使命を果たすために、ラジカル反応の研究に取り組んでいます。化学反応には大きく分けてイオン反応とラジカル反応の2つがあります。通常、有機分子の合成ではイオン反応が用いられますが、目的の有機分子を合成するためにときには何十もの工程を踏まなければなりません。一方、ラジカル反応ならばこの工程を大幅

に短縮でき、コストや環境負荷を削減できることが期待されています。そんなラジカル反応を実用化するには、その強い力を制御する必要があります。私には有機触媒によってラジカル反応を制御し、製薬会社と連携して実用化に取り組んできました。くすのき・125では医薬品として注目される生物機能分子に焦点を当て、ラジカル反応による合成に挑戦します。

さらに詳しい話は  
こちらから

創業の現場で必要とされる化学反応を設計する「オンデマンド有機合成」に取り組む



大宮 寛久  
OHMIYA HIROHISA  
化学研究所 教授

京都薬科大学で学んだのち、京都大学大学院工学研究科博士後期課程修了。北海道大学助教・准教授、金沢大学教授を経て2022年より現職。専門は有機合成化学。とくにラジカルを活用した触媒・反応・機能の創製を研究テーマとし、製薬会社との共同研究など産学連携にも積極的に取り組んでいる。



後藤 明弘

GOTO AKIHIRO

医学研究科 特定准教授

2013年、京都大学大学院生命科学研究所博士後期課程修了。博士(生命科学)。同大学院医学研究科助教などを経て、2023年4月より現職。専門は神経科学。記憶の物理的基盤の解明に関心を持ち、記憶の長期間保存に関する分子メカニズムの解明に取り組んでいる。2021年には光によって記憶を消去する手法を開発。医療への展開を視野に入れた応用研究にも取り組んでいる。

記憶の物理的な実体をつきとめ、人々の生活の質の向上につなげたい。「『記憶』研究を社会応用するための技術開発」

### 記

CALI 30min  
神経細胞に存在するコフィリンという分子を光で破壊し、記憶を消去する様子

記憶が脳内でどのように生まれ、保存されているのか、その物理的基盤を明らかにする研究に取り組んでいます。記憶に関わる脳領域を調べるために、私はまず光を使ってマウスの特定の脳領域に蓄えられた記憶を消去する技術を開発しました。これを用いた実験により、海馬と前帯状皮質という2つの脳領域の記憶への関与を明らかにすることができました。くすのき・125ではこの技術を他の

脳領域にも展開し、記憶のメカニズムを包括的に解明したいと考えています。また、光で記憶を制御する技術の医療応用を見据えて、古い記憶を消したり、反対に増強したりする応用研究にも取り組めます。記憶のメカニズムを明らかにすることで、将来的にはPTSDや認知症など記憶にまつわる疾患に苦しむ人々の力になりたいと考えています。

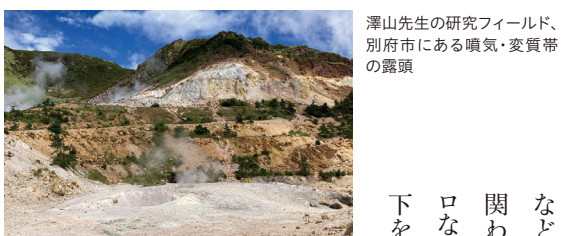
さらに詳しい話は  
こちらから



岩石の物性を切り口に、大地の恵みをもたらす  
地中世界の物理法則を探究する。

「地球熱システムの包括的理解が拓く地球と共存する社会」

### 地



下の流体がどのように存在し移動しているかは、温泉・地熱資源や地震・火山噴火など流体の関わる諸現象と深い関わりがあります。これをミクロな視点から解明するため、地下を構成する岩石を用いた数値解析と実験に取り組んでいます。数値解析では、デジタル化した岩石の隙間に水を流すことで、目に視えない地下の水の流れがどのようになっているかを解析しています。実験では、地上から観測

可能な地震波速度や電気的特性を地下の圧力を再現した条件下で測定し、これらの観測値から地下の水の貯留・流動特性にアクセスするための物理モデル構築に取り組んでいます。これらの手法を通して、地球の恵みである温泉や地熱流体を効率よく利用しつつ、火山噴火リスクの減災にも資するような、人間と地球が共存できる社会につながる研究をめぐっています。

さらに詳しい話は  
こちらから

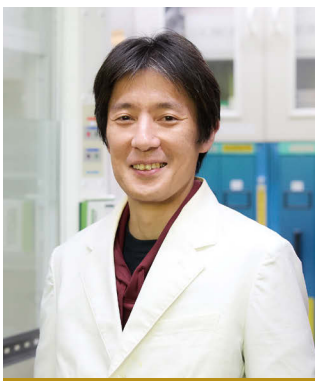


澤山 和貴

SAWAYAMA KAZUKI

理学研究科 助教

九州大学大学院工学府地球資源システム工学専攻博士後期課程修了。博士(工学)。2021年より現職。専門は岩石物理学で、実験と情報科学を組み合わせた手法で岩石の物性を探究し、汎用性の高い岩石物理モデルの構築・応用をめざす。所属する地球熱学研究施設の立地を活かし、地熱・温泉資源の持続的な開発もテーマに掲げている。



志津 功将

SHIZU KATSUYUKI

化学研究所 助教

京都大学大学院工学研究科博士後期課程分子工学専攻修了。専門分野は材料科学。主要な研究テーマは「電子遷移の起源を視覚化する量子化学手法の開発」で、材料が示すさまざまな物性と関係する電子遷移の起こりやすさ(遷移確率)を視覚化することで、材料が示す物性の起源を直感的に理解できるようになる新しい量子化学の方法論を提案している。

熱エネルギーの本質「振電相互作用」を見える化し、誰も活用できる技術に昇華させる。

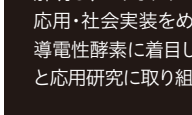
「持続可能なエネルギー利用を実現する振電工学」

### 工

エネルギー資源を無駄なく利用できる社会を実現するためには、熱エネルギーの排出を減らし、熱エネルギーを回収して再利用できる技術を開発する必要があります。ミクロな視点で見ると、熱の本質は原子核の振動運動であり、熱エネルギーは原子核と電子の間の相互作用によって発生します。振動運動の過程で発生する過剰なエネルギーは散逸してしましますが、もし振電相互作用を見える化することで自在

に制御することができれば、熱エネルギーの排出を削減できる材料や、熱エネルギーを光や電気などの他のエネルギーに変換できるデバイスの開発が可能になります。私は、この振電相互作用の制御に基づく新しい材料化学を『振電工学』と名付け、今後30年の間に、新たな学問領域として確立し、次世代に継承したいと考えています。

さらに詳しい話は  
こちらから

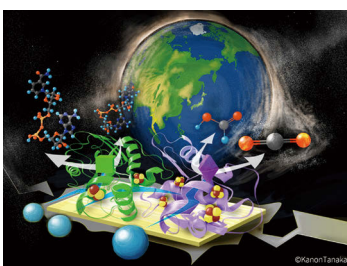


宋和 慶盛

SOWA KEISEI

農学研究科 助教

京都大学大学院農学研究科応用生命科学専攻博士後期課程修了。農学博士。三井化学アグロ株式会社、株式会社村田製作所での研究職勤務を経て、2021年2月より現職。専門は生物電気化学で、呼吸、代謝、光合成といった生物の機能を電気化学的に解明し、バイオテクノロジーへの応用・社会実装をめざす。とくに導電性酵素に着目して基礎研究と応用研究に取り組んでいる。



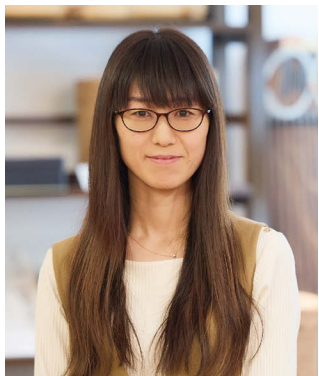
酵素の力でエネルギーの均衡、そして人間社会と自然の調和をめざす

地球の埋蔵エネルギーは早ければ数十年後には枯渇してしまうと言われています。エネルギー収支の均衡を保ちつつ人間社会と自然環境の調和した社会を実現するために、エネルギー変換効率が非常に優れた生体触媒、つまり酵素の研究に取り組んでいます。私が研究しているのは酸化還元酵素、なかでもとりわけ電気を通す性質をもつ導電性酵素というものです。導電性酵素を用

いれば、さまざまな物質の分子に変換し、効率的かつクリーンに取り出すことができます。くすのき・125では導電性酵素の特性をその形状から解明するとともに、バイオセンサーなどの社会実装につなげるための応用研究にも取り組んでいます。また、研究成果を社会に届けるためのベンチャー設立に向けて準備を進めています。

さらに詳しい話は  
こちらから





田鶴 寿弥子

TAZURU SUYAKO

生存圏研究所 講師

京都大学大学院農学研究科森林科学専攻博士課程修了。京都大学生存圏研究所博士研究員などを経て、2022年より現職。専門は、木材解剖学。樹種識別並びに新規識別手法の開発や、木質文化財における樹種データベースの構築、新旧手法を併用した木質文化財の科学調査による東アジアの木の文化の多様性解明へ向けて、様々な分野との学際研究を進めている。

小さな木片を通じて古代の人々の心に寄り添い、その息遣いを未来に届ける。

### 「東アジアの木彫像の用材をめぐる学際融合研究」

#### 私

私たちの身の回りには、歴史的な木造建築物や木彫像といった木質文化財は、たくさんの人たちの手によって材料が選ばれ、心を込めてつくられ、守られてきました。使われる樹種には、人が木とともに歩んだ歴史や環境だけでなく、選ばれた木に対してもつていた信仰や思想といった樹木観も含まれています。そうした古代の人々の木に対する思いを紐解くために、文

化財に使用されている木材を特定する研究を行っています。時代とともに移ろう人と木の関係、そして使われる樹種の変化について、他の学術分野の専門家たちとともにその歴史や文化的背景も含めて明らかにすることで、古代の人々の思いや英知を今を生きる私たちに、そしてその先の未来につなげていきたいと考えています。

さらに詳しい話は  
こちらから



京都大学に引き継がれてきた貴重な木材標本を管理する「材鑑調査室」



中村 秀樹

NAKAMURA HIDEKI

白眉センター 特定准教授

東京大学大学院理学系研究科博士後期課程修了。理化学研究所、早稲田大学に勤務し、2014年よりジョンズ・ホプキンス大学留学。2019年に京都大学に着任し、2021年より現職。非平衡物理学、分子生物学といった分野を経験し、現在の専門は合成生物学。生きた細胞内のタンパク質を「操る」技術を基盤に、生命現象を理解することをめざしている。

細胞という小さな社会、そのインフラストラクチャーを自在にデザインし、生命を理解する。

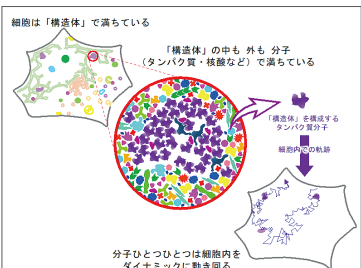
### 「『細胞内マイクロ建築学』の創成」

#### 細

細胞の内部はさまざまな構造体で満たされており、その構造体はさらに多数の分子によって構成されています。細胞はこれらがダイナミックに動き回りながらそれぞれの役割を果たす、いわばひとつの社会と捉えることができて

きるでしょう。私は、この社会を支えるインフラストラクチャー、つまり構造体を自在につくったり、壊したり、つくり変えたりする研究領域「細胞内マイクロ建築学」を創設したいと考えています。現在挑戦しているのは、光を使ってタンパク質を集める技術と、集まったタンパク質をゆつくりつなげる技術を組み合わせ、細胞内に任意の形の構造体をつくる研究です。「細胞内マイクロ建築学」は生命現象をより深く理解する足がかりになるだけでなく、疾患に対する新たな治療法の開発にもつながるでしょう。

さらに詳しい話は  
こちらから



細胞内では多数の構造体とそれらを構成する分子がダイナミックに動き回っている

細胞は「構造体」で満ちている。「構造体」の中も、外も分子(タンパク質・核酸など)で満ちている。「構造体」を構成するタンパク質分子。細胞内の構造。分子ひとつひとつは細胞内をダイナミックに動き回る

自然免疫システムと遠隔転移の関係を究明し、人々が安心してがん治療に向き合える未来へ。「がんの遠隔転移は予防できるのか？」

#### 私

京都大学医学部附属病院でがん放射線治療の専門医として診療にあたりながら、自然免疫システムのひとつ「好中球細胞外トラップス(NETs)」の研究に取り組んでいます。がん治療の進歩は目覚ましく、ステージが進んでも局所がんであれば根治をめざせるようになってきています。しかし、遠隔転移が起こってしまうと現在の医療でできることは限られます。近年の研究で、そんな恐ろしい遠隔

転移にNETsが関係しており、さらには放射線治療がNETsを引き起こす可能性があることが少しずつわかってきました。そこで私は、放射線治療とNETs、遠隔転移の関係を明らかにすることで、遠隔転移を予防する方法の確立につなげたいと考えています。くすのき・125では、特にNETsを抑制する薬に重点を置いて研究開発に取り組んでいます。

さらに詳しい話は  
こちらから



京都大学医学部附属病院に導入された高精度放射線治療装置「ETHOS」



中島 良太

NAKASHIMA RYOTA

医学部附属病院 助教

2018年、京都大学大学院医学研究科博士課程医学専攻修了。学位取得後、3年間のカナダ・トロント大学留学を経て、2021年4月より現職。専門はがん放射線治療で、専門医として臨床に携わりながら研究に取り組んでいる。研究テーマは好中球細胞外トラップス(NETs)を介したがん遠隔転移メカニズムの解明と予防法開発、放射線治療の妨げとなる放射線治療抵抗性因子の究明など。

生命を駆動する現象・「化学振動」を制御し、新しい化学の地平を拓く。

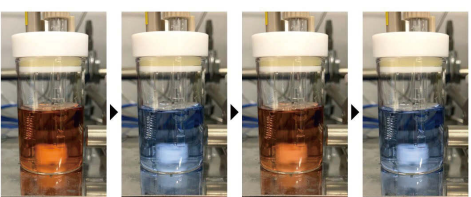
### 「化学反応の『振動』と光触媒で実現する化学デバイス」

#### 人

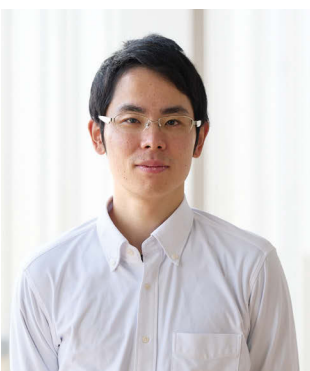
人間は化学反応によって有用な人工物を生み出し利用してきましたが、私たち生物の活動もまた途方もない数の化学反応が連鎖した結果として存在します。化学とは、人工物と自然物に共通する普遍的な領域を扱う学問だと言えるのではないのでしょうか。そんな化学観を体現するものとして、生命現象を化学的に模倣して駆動するデバイスを開発したいと考えています。私が注目したのは、化学反応が波のように周期

的に起こる「化学振動」という現象です。くすのき・125では、私の専門である固体光触媒を用いることで化学振動を制御することに挑戦します。生命現象と関わりの深い化学振動と、原始的な有機物の誕生にも関与していたとされる固体触媒との関係を探ることは、生命の起源の解明にもつながりうる重要なテーマだと考えています。

さらに詳しい話は  
こちらから



代表的な化学振動であるBZ反応の様子



浪花 晋平

NANIWA SHINPEI

工学研究科 助教

2022年、京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。同年4月より現職。専門は触媒化学。現在は固体触媒を用いたCO<sub>2</sub>の水素化や有機合成などのテーマに取り組む傍ら、学部生のときに出会い心惹かれた化学振動についても独自に研究を行い、固体触媒・光触媒による化学振動の制御技術の確立と、それを応用したデバイスの開発をめざす。



原田 英典

HARADA HIDENORI

アジア・アフリカ地域研究研究科  
准教授

京都大学大学院地球環境学会博士課程修了。博士(地球環境学)。2020年より現職。専門は環境工学。アジア、アフリカをフィールドとして、ハードとソフトの両面から水と衛生の改善に取り組む。2022年からはSDGsの目標6(水と衛生)の公式モニタリング・メカニズムでもある世界保健機構・国連児童基金「水と衛生に関する共同モニタリング・プログラム」の諮問委員として、水と衛生のモニタリングの国際的議論にも携わっている。

し尿や排水の「始末」を自分ごとと捉え、私たちの暮らしを変える。

「未来のサニテーションが実現する自由なくらしと水・物質循環系」

### 清

浄な水は生きるために欠かせませんが、生活しているとし尿や排水も発生します。その始末をきちんとつけなければ環境は汚染され、水の循環が成り立たなくなってしまう。私はアジアやアフリカをフィールドとして、水と衛生に問題を抱えた地域にトイレやその先のし尿・排水の始末を含めた衛生管理、つまりサニテーションを根付かせる研究を行っています。資源循環型トイレを

設置するなどのハード面のアプローチとともに、サニテーションを「自分ごと」にするためのソフト面の仕組みも重要です。自分で使ったものに自分で始末をつけるという小さな循環を大切にしていくことで、今ある場所の衛生状態を改善できるだけでなく、大きなインフラに頼らず、人々がどこでも暮らしたい場所で暮らせる未来が訪れるでしょう。

さらに詳しい話は  
こちらから



マラウイでの資源循環型トイレの建設現場にて



向吉 恵

MUKOYOSHI MEGUMI

理学研究科 助教

京都大学大学院理学研究科修士課程修了後、民間企業の研究職を経て2022年に同研究科 特定助教に着任。2023年より現職。専門は無機化学。民間企業での経験からナノ材料のアモルファス構造に興味を持ち、白金族元素を対象にアモルファス構造とその物性の関係を明らかにすることをめざして研究に取り組んでいる。

物質の構造の歪みや乱れに着目し、元素の潜在能力を引き出す。

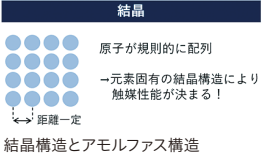
「『乱雑さ』の科学から生まれる新しい物質開発」

### 学

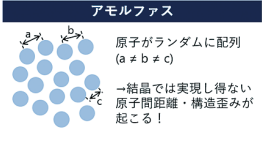
生の頃から触媒に使われるような金属ナノ粒子を扱っていたのですが、民間企業に就職して実際の工業用触媒を目にしたとき、その乱雑さに驚きました。大学で扱うナノ粒子は整った結晶構造をもつものばかりで、乱雑な構造が物性や材料としての性能にどんな影響を与えるのかはほとんど研究されていません。そのことに可能性を感じて、京都大学に戻ってからはアモルファス構造、つまり結晶構造ではない不規則な原子配列の構造をもつ

ナノ材料の研究をはじめました。くすのき・125では、単成分の白金族でアモルファス構造をもつナノ粒子の生成・解析という難題に挑戦します。元素のもつ力を構造の違いによってさらに引き出すことができるようになれば、希少な埋蔵資源をめぐる争いを防止することにもつながるでしょう。

さらに詳しい話は  
こちらから



結晶構造とアモルファス構造



アモルファス

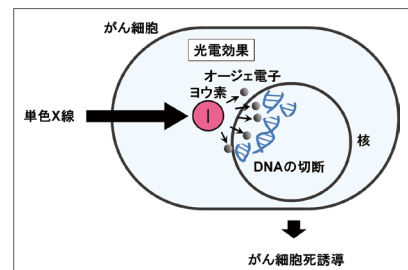


既存の放射線治療を超える治療法を確立し、「がんは治せる」時代を切り開く。

「オージェ電子を用いた新規放射線治療を創出する」

### が

放射線治療分野では、白色X線を照射することで細胞内に生じる活性酸素ががん細胞を死滅させるという間接的な効果への依存度が高く、活性酸素が発生しづらい低酸素状態のがんでは放射線治療の効果が低いという重大な問題があります。私たちは合成したヨウ素など、たくさんの電子を有する「高Z元素含有ナノ粒子」を取り込ませたがん細胞に単色X線を照射



がん細胞内で発生したオージェ電子によるがん細胞死誘導の模式図

して「オージェ電子」をがん細胞内に発生させることで、効率的に細胞死が誘導されることを明らかにしました。オージェ電子によってがん細胞のDNAが直接切断されることで、細胞死が誘導されるのです。オージェ電子とナノテクノロジーを組み合わせた新規放射線治療を確立することで、既存の放射線治療の問題を乗り越え一人でも多くのがん患者を救える未来を実現したいと思います。



松本 光太郎

MATSUMOTO KOTARO

高等研究院 物質-細胞統合システム拠点(iCeMS) 特定助教

博士(生命科学)。東洋大学バイオ・ナノエレクトロニクス研究センター研究助手を経て現職。ナノ材料を用いた医療技術の研究開発に携わり、2019年には単色X線と多孔性ナノ粒子を組み合わせた技術によりがん細胞のみを局所的に死滅させることに成功。新たながん治療法への展開をめざしている。

# 京都大学への ご支援のお願い

京都大学は2022年に迎えた創立125周年において、国際競争力強化・研究力強化・社会連携推進を3つの柱とし、学内ファンド「くすのき・125」をはじめ、“京大力”を発揮できる優れた人材の育成に取り組んできました。

京都大学の基本理念にある「地球社会の調和ある共存」のために、果敢に取り組む人材。瑞々しい感性により、既存の学問の分野を超え、新しい課題設定と解決策を見出す人材。日本人の心の核である文化を見直し深めることにより、未来社会をつくる原動力となる人材。これらの人材育成の取り組みは125周年後も続いています。

皆様からいただいたご支援は、これらの人材育成のための資金として活用するほか、運用のための原資としてプールし、その運用益を基礎研究等に充当します。心からの感謝の気持ちを込めて大切に、そして有意義に活用いたします。

今後なお一層の京都大学基金へのご支援をお願いいたします。



京都大学基金  
KYOTO UNIVERSITY FUND  
寄付の詳細はこちら

くすのき・125採択者紹介 Vol.3

2024年3月29日 第1版 発行

制作：京都大学 学術研究展開センター

制作協力：京都大学 成長戦略本部

冊子デザイン：株式会社hotozero

本冊子に関するお問い合わせ：

京都大学 学術研究展開センター くすのき・125

kusunoki125@kura.kyoto-u.ac.jp

本誌の無断複製・複写・転載・電子化を禁じます